

特集「自然・命・平和」

▶1995年、長野県喬木村の元島さん宅を訪ねた筆者。テーブルには一年前に亡くなられたお父さん、浅雄さんの写真。「さみしいね」とポツリとみつえさん。



遙かな旅ある母の人生

北 総 の 里

発行日 2017. 12. 18
第 238 号
(第 1 回発行)
1974年4月1日
発行所 北総育成園
千葉県香取郡東庄町
笹川い5852
☎ 0478-86-3003
FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが新しくなりました!

施設の概要や理念、利用者の様子、園長からのお知らせ等、盛りだくさん!ぜひアクセスしてみてください。

ホームページアドレス
<http://www.hokuso-ikuseien.org/>

Eメールアドレス
hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp

11月後半になると今年も当園宛てに「喪中葉書」が届く。出す人にとっては父母であり祖父母の死

であることが多い。障害者支援のこの仕事では保護者とのご縁が生まれる。我が子の行く末を案じて、どうしたらこの子が幸せなのか、毎日毎日途方に暮れて、その気持ちを、施設が良くなるために、と献身的に力を貸してくれた父母。そんなちははの亡くなったことを知らせる喪中葉書。元、当園利用者、元島常嘉さんのお母さんみつえさんが亡くなられた喪中葉書が信州から届いた(享年98才)。随分長生きされた。息子の常嘉さん(昭和31年生まれ。ダウン症)は当園が開園した1974



▶元島みつえ著「夕映えの地平線」みつえ二十歳満州花嫁」おさひめ書房より

(昭和49)年から1990(平成2)

年迄在籍した。ダウン症特有の強いこだわりを持ち、生活日課に自分なりのルールがあり頑固一徹。梃子でも動かない。しかし、抜群のユーモアの持ち主。誰からも「もとさん、もとさん」と愛された。父母は船橋市で八百屋さんをやっていたが、老後は生まれ故郷の信州でということ、年号が平成に変わる頃、長野県下伊那郡喬木村の山里に引っ越していった。筆者も生まれは同郷で山一つ越えた上伊那郡高遠町。そんな関係で保護者会で会えば親しく信州弁で話が弾んだ。常嘉さんもその後、下伊那の阿南学園に移ることが出来た。そして、30年の歳月は流れて、毎年秋に信州林檎を園宛て送ってくれて、お互いの息災の確認の縁は継続された。人にはそれぞれにそれぞれの人生がある。幸せや不如意。いろんなことを抱えながら歳を重ねて生きて行く。生きている時代が今のような平和な時代であればよいのだが、それが戦という理不尽な時代と重なる、言葉が失うような生き死にを強いられる。(武井)

※6頁「街道をゆく③」に続く

ボランティアこそ 最高のオンブズマン

北総育成園では毎年、船橋市や地元東庄町、香取市のボランティア団体の皆様にご来園頂き作業活動を通して「働くこと生きること」を体験して頂いております。ボランティアの皆様も高齢となり一時より受け入れ人数は減っていますが、昨年28年度は6団体110名のお手伝いを頂きました。もう30年以上の長い付き合い合いとなるボランティア団体の皆様もおり、年一回の交流でも「やあ、元気だった?」「今年も来たよ!」と利用者に気さくに声を掛けてくださいます。「ボランティアこそ最高のオンブズマン」。武井園長が折に触れて職員にメッセージする言葉です。入所施設はともすれば閉鎖的になる恐れが常にあります。外部の方に来て頂き、作業や生活のありのままの様子を見てもらう事が何より大切。その目と心が施設の健全な運営に繋がると思います。今号では実際にボランティア活動をして頂いた皆様から感想を寄せて頂きましたのでご紹介致します。紙面構成の都合上ご寄稿くださった皆様全員分の感想を掲載できず申し訳ありません。

①北総育成園を見学して 習合さずなの会 小迫 薫

北総育成園のことは何も知らずに参加させていただきました。こんなに遠い所に船橋市の障がい者の施設があることにびっくりしました。とても広々としてどこもかしこも綺麗に整ってました。園長先生のお話では今日皆さんが見えるので特別にお掃除をしておきましたと笑っておりました。入居者の方々もお年を取って御両親も亡くなり又御兄弟も高齢になつたりで面会にきてくれることも少なくなつてお正月もここで過ごす方が多くなつており、又これからは癌になつたりして手術、延命治療などの判断に困るといってお話で本当に大変だなと思えました。午後私共3人は陶芸班で箸置きを作る作業をしました。棚には出来上がった干支の置物、花瓶など沢山の作品が並んでいました。ステキな花瓶が目に入り分けていただけませんかと同つたら、OKということで買わせていただきました。すぐ前に作者がいらしたのでサインをお願いしましたら恥ずかしそうにニコニコしていただき添っていた職員さんが「出来るよね」と言ったら底にひらがなで名を書い

てくれました。ハゼの箸置きを上手に作っている方、重度の方は紙やすりで凸凹をこすっていました。障がいに合わせていろいろな作業をしていました。その他に木工・手芸・園芸・野菜作りなどの作業があります。入居者の方々の生活、作業などの面倒を見ていらつしやる職員さんの心が広くて暖かいのが印象に残りました。

②北総育成園研修会に参加して ボランティアこたま会 飯塚 久子

北総育成園、その名を知つたのは、船橋アリーナにおいて、入居者の方々が演じられていた『夕鶴』の舞台を観劇したのがきっかけでした。定年退職した後ボランティアこたま会の会員になり北総育成園を見学させて頂く機会を得、今回で4度目の参加となりました。



▲習志野台地区のボランティアの皆さん。(農耕班のラッキョウ加工) H29.10.19

参加するたびにいつも感心させられます。園の玄関に並べられた、お芋、切干し大根、シクラメンの鉢、手芸品等手作りの品の数々、それらを眺めているととても穏やかな気持ちになります。さぞかし御苦労なさつておられるだろうと思います。が、武井園長の慈愛に満ちた園の紹介と理念、それに職員の方々の明るい振舞い、各部屋に飾られた一輪の花々等で、園全体に幸せ感が満ちた不安感が全く見受けられないのです。近年高齢化が進み、入居されている方の御両親も亡くなられているのが現実です。しかし、職員の方々と利用者さんと共に生きる一つの社会が形成されておりここでの生活が幸せに繋がっていると思われました。園の理念、共に働き、共に育つ、を柱にお互い助け合い寄り添って日々を過ごす。それが穏やかな日常なのですね。ともすると60代後半の私は不平不満を口にし、当たり前の日常に感謝する気持ちを忘れがちでした。北総育成園を見学するたびに気持ちがりセットされ、前向きに穏やかな気持ちでくらし行こうと反省の機会が与えられる様な気がして有難く思います。

作業のお手伝いをしながら一つ一つが体験になり、学習になります。お土産品をたくさん買い込み、毎回穏やかな気持ちで帰路に着けるのです。

園の皆様、本当に有難うございました。末永く発展されます事を祈り致します。

3 北総育成園のお手伝いで

三田地区福祉を考える会 西田 雅子
福祉を考える会

今年もまた、皆さんにお会い出来ました。三田地区福祉を考える会が、北総育成園さんでお手伝いをさせて頂くようになって10年になります。いつも笑顔で出迎えて下さる園長先生と村長さんに、また元気で目にかかれたことに喜びを感じます。子供を想う親の気持ちから始まったというこの施設も43年になるとのこと。長い年月、入所者の方も、お世話される方も、お互い年齢を重ねて来られ、いろんな面で大変なこともあるでしょうが、自分に与えられた作業をひたすら続けている人、眠っている人、その人達に優しく声をかけをしておられる職員の方の眼差しに、一緒に作業させて頂いている私達も、暖かい気持ちになりふっと笑みがこぼれます。皆さん心穏やかに

のびのびと生活しておられることがわかります。今年も手芸班のお手伝いをさせて頂きました。少しでも多く手助けをしたいと、一生懸命布をカットしましたが、もっともっとお手伝いしたかったのという思いがいつもあります。時間が足りません。もう少し近ければ、もう少し早く来ることが出来たらと毎年、心を残して帰途に着きます。

北総育成園も建物が新しくなり、皆さんの住まいも個室になり、恵まれた環境の中で、入所者の皆さんが心豊かに生活されることを願っています。ここが船橋市の施設であることに誇りを感じ、いつまでも継続出来ますように……来年も又、お手伝いに参ります。

施設の皆様、ご苦労様です。入所者の皆さんの為に元気で頑張ってください。



▲三田習地区のボランティアの皆さん。(手芸介護班の布の裁断) H29.11.7

一期一会一輪の花

千葉県知的障害者福祉協会
権利擁護委員会

委員長 濱本 典子

秋雨の候、10月13日千葉県福祉協会権利擁護委員11名が北総育成園様を見学させていただきました。見学の目的は、各委員が自分の支援に活かすこと。朝から冷たい雨が降る中でしたが、武井園長様の心に響くご講話、白樫副園長様のご丁寧な見学のお対応に深く感謝いたします。

武井園長様のご講話は、船橋市手をつなぐ育成会設立当初の親御さんのご苦勞話から始まり、44年間にわたる施設の歴史と「はたらくこと、いきること」を大切にされた施設の理念をお伝え下さいました。おごらず、高ぶらず、「あたりまえ」と謙虚にお話された武井園長様に、私たちは、心をぎゅぎゅっと掴まれてしまいました。

その後の施設内外の見学は、その理念が施設の随所に息づいていることを感じさせてくれました。各居室に控えめに飾られている「一輪の花」に「今日も一生懸命この人達によく

寄り添います」と職員の皆様は心に誓うのだそうです。園長様は「一輪の花」をご覧になれるだけで、生けた職員のお顔が脳裏に浮かぶのだとか。職員の個性を重んじられ、個性に合った人材育成をされていらっしゃるご様子が垣間見られた一面でした。たかが一輪されど一輪。44年の長きにわたり、人を替え、器を替え、野の花が活かされる歴史は脈々と受け継がれてきているようです。

私たちの感動は、生活棟だけではなく、作業棟にまで続きます。年齢を重ねられた利用者さんがエプロン姿で作業場の椅子に腰掛けられているお姿が、いずこの作業場でも拝見することができました。お若い時の作業に、もう今は携わることにはできなくとも、作業着に着替え、ご自分の居場所が保障されていらつしやる安心感と、通う場がある充実感に満ち足りた利用者さんの表情に、こちらでも思わず微笑みで返していました。

施設の理念が利用者さんへの支援に、そして生活・作業の場に浸透されていることがうかがえる見学会でした。また、施設が重ねた年輪が、確かにそこに存在していることを、実感できた見学会でもありました。



「いつまでも 食べる楽しみを」 大久保学園給食研修から学ぶ

北総でも近年は高齢化が進み、平均年齢は55歳を超えています。加齢による身体機能の低下は顕著であり、自力歩行がままならない方も増えてきました。そして、もう一つ、加齢による機能低下が顕著なのが咀嚼・嚥下機能です。現在北総では粗刻み食が14名、超刻み食が4名、ペースト食が4名となつていますが、今後増加の一途を辿る事は容易に予想されます。

そのような現状の中、食事提供の難しさに直面しています。人生の最後までおいしい食事提供が出来ないか？という思いは何処の施設でも一緒です。その「おいしい」は単に味付けだけではなく、見た目も大いに関係があると日々の食事の現場で感じます。施設ではつまりやむせ込みを防ぐため「安全」な食事提供を第一に優先することは間違いありませんが、だからと言って食べる当人の気持ちを無視することは絶対にあってはならないこと。特に施設での食事は大勢で食べるので、人と自分の食事が違うことは、私達が思っている以上にがっかりしてしまうものだと思います。ましてや、この人たちはその不満を表現する事が難しい方

も多いです。誰もその思いを汲み取ってくれないと感じた時、食べることを諦めてしまったら、こんなに切ない事はありません。

今後の食事提供において北総でも過渡期にきていると思います。健康に留意しながらも見た目や味付けに配慮された食事、高タンパク低カロリーへの献立、そして嚥むことが難しくなっても飲み込みやすい食事形態の開拓が求められています。その要望に応えるものとして、介護食、いわゆるソフト食、ムース食という食事形態があります。10月18日に大久保学園で開催された千葉県知的障害者福祉協会主催の給食研修でも、実際のソフト食提供の様子を聞き、また試食会もあり、参加した職員からとても良い勉強になり、今後の北総での食事提供においても大いに参考になったと報告がありました。実際



▲大久保学園での給食研修。ソフト食を試食でき、とても勉強になった。本物そっくり。H29.10.18

にソフト食を導入するには、人員配置や手順、コスト面、介助の仕方等、越えなければならぬ課題はたくさんありますが、最後まで食べる楽しみを持って生き生きと生活できる為には前向きに検討すべきものと考えます。その為には厨房だけの問題で

太田川の ほっとり (132)



私は小さい頃から動物が好きで、動物関係の大学に行きました。大学では主に犬の事を学び愛犬と共にアジリティというドッグスポーツを行ったり、躰や行動学について学んできました。犬は人としが行わない行動があります。それはアイコンタクトです。ご飯が欲しい時など人に何かを伝えたい時に良く見られます。これは犬同士ではほとんど見られません。本来、見つめ合うという事は威嚇の意味があるからです。しかし、犬は人と生活していく中でアイコンタクトを身に付けていき、それがお互いにとって共通のコミュニケーションシヨンツールとなる事で意思疎通がしやすくなりました。これはこの仕事においても少なからず活かせるのではないかと思います。言葉が話せない人、上手く自分の意思が伝えられない人と接するとき、その一人一人に合ったコミュニケーション

はなく、支援、医務も加わり三位一体となって取り組んでいく事が大切です。この仕事の基本はチームワーク。お互いの専門性と知恵を出し合つて今後の課題に立ち向かってくると思います。

(給食厚生委員会 絵鳩)

ツールを見つける事によってお互いに伝わらないストレスを減らす事が出来るのではないかと思います。

ここ北総には犬のハク、マユをはじめと沢山の生き物と共存しています。動物と触れあつたり撫でたりすると人の気持ちを落ち着かせることが出来ると分かっています。休日課には利用者の方と一緒に犬の散歩も行つており、動物好きな人は楽しみにしてくれています。沢山の動物に囲まれながら生活する事で家族のような存在になつていければと思います。

(木村)



▲須賀山城址開山祭。愛犬のリアンちゃん(ボーダーコリー)と息の合った芸を披露してくれた木村さん。H29.5.27



改めて「一期一会一輪の花」

北総が大切にしている精神に「一期一会一輪の花」があります。茶道の精神である「一期一会」に「一輪の花」を付け加えたこの言葉は、武井園長が我々職員を持つべき心構えとして生み出したもの。物言わず誰かに見られる事に頓着せず、でもひっそりときれいに花を咲かせる名もない野の花にこの人たちの生き方を重ね、その命そのものを大切にしようという思いが込められています。四季がある日本の国は、その季節それぞれにきれいな野の草花が咲いています。出勤途中の僅かなひと時。足元に咲いている名もない野の草花を感謝の気持ちと共に摘んで、「この人にはこの花が似合うかな」と利用者の顔を思い浮かべながら活ける。その所作に「今日も謙虚にこの人たちに寄り添います」という気持ちを含めながら。野の花には陶芸班手作りの素朴な一輪挿しが良く似合います。

施設暮らしは毎日と同じ顔触れで、同じ日課の繰り返し。いつしか仕事に慣れていき、知的障害を引き受け懸命に生きていくこの人たちの生き辛さにも慣れていきます。その慣れは、利用者一人ひとりの言葉にできない想いを汲み取る目配り、心配りの姿勢を見失わせます。表情やしぐさ、言葉遣い、声のトーン、返事の仕方、色々なサインで自分の気持ち、願いを一杯表現しているこの人たち。私たち職員が忙しさや時間の無さを言い

訳にして、この人たちの前をただ素通りしていたら、声も掛けずに介助の動作だけしていたら。この人たちは花が枯れるように、生き生きとした心を失っていくでしょう。逆に、職員の明るい挨拶や労いの声掛け、ユーモアに包まれた会話、温かい手当を受けた時、お日様の陽を浴びて新鮮な水が与えられた花のように生き生きと笑顔を咲かせてくれるでしょう。もちろん、いつも楽しいやり取りだけでなく、時には注意をしたり反省を促すようなやり取りもしなくてはなりません。そこは「顔を立てる、折り合いを付ける、立つ瀬を残す」というもう一つの北総精神でもって心を込めて対応すれば、この人たちはきっとわかってくれます。それは障害の重さに関係ありません。言葉がないから、話しかけても返事が返ってこないからわかっていない、なんてことは絶対にありません。



▶ 個室の「一輪の花」。壁にはその人の「働くこと」を生きる「こと」の写真を飾っている。

どんなに法律や制度が変わっても、この人たちの命を守るのは支援者の手と目と心です。命そのものを大切にすること、事に誇りを持って、今日も一輪の花を飾ります。(絵鳩)

平成4年の姉妹提携から26年。長崎県南島原市中心に広く社会福祉・地域貢献事業を展開しているコスモス会さんと北総育成園はすでに四半世紀を超えて交流を続けています。その前年に厚生省(当時)海外研修で出会ったコスモス会理事長本田利峰先生と武井園長の御縁から今日までお互いを訪ねあい親交を深め、北総育成園はコスモス会さんから多くの学びを深めてきました。農耕班の切干大根はその最たるもの。園長・齋藤主任が利用者2名とその製法を研修に行ったのは平成8年のこと。コスモス会の切干大根は現在10町歩の畑で1000袋の大根を収穫し週に1000袋を生産し全国展開しているのですから、北総はとも足元に

姉妹交流

長崎の姉・コスモス会の皆様来園



今年も長崎の姉コスモス会の皆さんが来てくれた。H29.11.28

は及びません。今年もそろそろ冬の一番仕事「切干大根づくり」が始まります。

今年11月28日(火)に、職員3名利用者2名で北総を訪れてくれました。初めて訪問して下さった野口さん高木さんは、特に北総の生活空間「一期一会一輪の花」、高齢者重度者も皆それぞれの「働くこと生きること」の取り組みを熱心に見て下さいました。当日15時30分、全員でお出迎え、夜は鯉屋旅館で懇親会。村長山本泰三さんの挨拶、荒井施設長の笛に合わせて荒木さん勝又さん中心に職員利用者全員での下座踊り、福田さんのどじょうすくい安楽節、皆でカラオケ。翌朝は、雲一つない青空の下雄大な利根川と北総大地を見て頂いてから、作業班の見学。利用者もそれぞれの仕事を誇らしげに紹介しました。そして林産班の作業場山道を登って須賀山城址から笹川の町並みを皆ながめました。交流の時間はあっという間に過ぎてしまし、笹川なずな工房・GH野の花の見学をして笑顔と握手でお見送り。お互いの友情を固く誓いました。これからも私たちの交流は続きます。(白樫)

※次号の広報紙「北総の里」にてコスモス会の皆様から頂いた北総を訪問しての感想を掲載する予定です。

街道をゆく 136

遙かな旅ある母の人生②

武井 敏朗

話は1940(昭和15)年に遡る。

太平洋戦争の真つ最中である。当時、日本は中国大陸に満州国を築き、その広大な国土に日本の貧しい農山村の人たちを送り込んだ。所謂、満蒙開拓である。その数、全国で数十万人に上る(長野県が全国で一番多い開拓団を出した)。その年、夫の元島浅雄(25歳)と妻みつえ(20歳)は新潟港から船に乗る。日本を出て5日、開拓地に着いた。場所は見渡す限りの未開墾の大地。遙か地平線に見える微かな山はロシア国境。冬の寒さは厳しかったがここは肥沃な大地。とうもろこし、大豆、コーリヤンがよく実り、それらは軍が高値で買い取ってくれた。「満州へ来て良かった」、みつえはそう思った。が、事態は急変する。20年春、突然、夫の浅雄に現地召集令状が届いた。20年8月7日、畑にいたみつえは大勢の関東軍を乗せたトラックが目の前を通り過ぎて行くのを見た。開拓民を置き去りにして逃げる関東軍のト

ラックとは開拓民の誰が予想したか。その夜、緊急伝令が届いた。「身の回りの物だけ持って直ちにポツリに向かえ」。何が何だか訳の分からぬまま、みつえは二人の乳飲み子を抱えて、他の村人と逃避行の渦中に巻き込まれた。ロシア軍機がコーリヤン畑に身を隠すみつえたちを目掛けて雨のように爆撃してきた。ここはその地獄の逃避行を語る余白はない。みつえは乳飲み子を死なせ、4歳の文をその混乱の中で見失う。「文やー、文やー、生きていろよ」。その後、奇跡的に命長らえたみつえは1946(昭和21)年7月引き上げ船の人となる。船は九州の枕崎に着いた。DDTの白い粉をかけられ、列車に乗り継ぎ故郷の信州を目指す。途中、広島街を抜けた。原爆から一年が経とうとしているヒロシマ。ホームの車窓から見える何もない景色が取り分け印象に残った。名古屋から中央線に乗る。辰野で飯田線。懐かしい地元、時又駅に降り立った時は既に夕暮近かった。駅前

再び家への道を歩いた。月明りの棚田が点在する風景の中に家々の明かり。「畑も田もこんなに小さいのか。満州とは大違いだ」。自宅の前に立った。ほそい亭の女将が家に連絡してくれていた。気配を感じて家の中から父母が飛び出してきた。「みつっちゃ! おかえり! よくかえつたな!」。ちはははもそれだけ言うた絶句。みつえは涙が流れて止まらなかった。シベリアに抑留され辛酸を舐めた夫、浅雄が引き上げ船で1948(昭和23)年8月、日本に帰って来た。やがて、浅雄とみつえは一念発起の新しい人生を歩む。千葉県船橋市で八百屋を開いた。野菜や果物をいっぱい積んだリヤカーを引き、夫婦で売り歩いた。満州の辛酸を思えば何でもなかった。時代は過ぎ1956(昭和56)年。中国残留孤児の日本へ帰国するため家族探しが日本赤十字社と厚生省で本格的に行われることとなった。新聞に残留孤児の写真が一覧された。浅雄とみつえは一人一人の孤児の顔写真を丹念に見入った。と、一人の丸顔の女性が目に留まった。「お前の若い頃にそっくりだな」。一日として忘れたことのない娘の幼顔。

写真には身の上が書かれていた。中国で子のない老夫婦に育てられて大学を出て、今は小学校教師とあった。あの戦争から離れて36年。東京代々木の対面会場で会ったその人はまさに生き別れた文であった。ちはははも文も言葉がなかった。ただただ涙が留まらない。筆者はその後、同郷信州のご縁で、お里帰りをする時は喬木村の元島さんの家を訪ねた。早速、酒が出て「泊まっていけ」と促される。浅雄は酒を飲みながら「戦争はダメだ!」と鼻水流して、涙を流した。みつえはその横で静かに頷いていた。息子の常嘉さんは今年62歳。老いた白髪頭の頑固爺さんになった今も阿南学園で頑張って生きている。あの戦争から72年。ナガサキ、ヒロシマの原爆。住民を巻き込んだ沖縄戦。東京大空襲。上げれば切りが無い多くの犠牲者の上に平和憲法が成立。戦後の平和は確保された。筆者の親父もビルマインパール作戦の生き残りで、酒を飲むと「戦争はダメだ」と叫んでいた。(完)

参考文献

元島みつえ著「夕映えの地平線」みつえ二十歳 満州花嫁」おさひめ書房
和田登著「望郷 中国残留孤児の父・山本慈昭」くもん出版

(文中敬称略)

10/25

長寿を祝う会開催

去る10月25日、秋の一日外出行事で銚子・太陽の里に皆で出かけました。この行事では、60歳以上の利用者の方を対象に「長寿を祝う会」を企画しました。長寿のお祝いの対象となる利用者は24名。高齢となり以前と比べ歩くことや食べることに不如意を抱えるようになった方も多くいますが、それでも「働くこと生きること」の心意気は未だ現役の皆さん。それぞれの作業班で自分ができる事に精一杯取り組んでおられます。そんな姿を敬い皆でお祝いしよう、実行委員を中心に準備を進めてきました。

当日は生憎の雨模様となりましたが、銚子の屏風ヶ浦の絶景を車窓から見ながら犬吠崎にある太陽の里へ。総勢106名が一堂に会し「長寿を祝う会」を開催。名前を呼ばれると担任のエスコートのもと壇上へ。お祝いの品は手芸介護班手作りのちゃんちゃんこ。還暦(60歳)は赤、緑寿(65歳)は緑、古希(70歳)は紺、喜寿(77歳)は黄、傘寿(80歳)は紫色。背中には武田菱の家紋入りの北総オリジナルちゃんちゃんこ。ちゃんちゃんこを着た皆の顔はとて



▲長寿を祝う会。色とりどりのちゃんちゃんこが園長を囲んだ。H29.10.25

も誇らしげでした。園長のお祝いの言葉と記念品贈呈の後は、北総で生きてきた歴史を振り返るスライド上映。今は車椅子生活となったMさんやKさんが、運動会で走っている写真、今は亡き父や母、仲間と笑顔で写る写真...。「人に歴史あり」と言いますが、親元を離れ心細く不安な気持ちをごらえながら、一生懸命生きてきたその姿はとても尊いものです。普段から武井園長より「記録は大切に」と教えを受けていますが、今回、一人ひとりの写真を用意するにあたり改めてその意味を実感しました。

スライド上映の後は美味しい食事とお楽しみクラス対抗カラオケ大会で盛り上がりました。そして最後は

北総俳壇①

※ポーナスだ少しせいたく許される
鶺野 翔悟

※車椅子が増えて廊下が渋滞だ
※数歩でも歩く時間を大切に
老いのスピード緩めたい
絵鳩 典子

※ため息が漏れていますよ猪田さん
※ジングルベル 真夏に歌う登せん
三浦 圭織

旅回りの劇団による演劇観覧。迫力ある刀での立会いや、涙ありの人情劇に利用者も大喜び。決闘シーンでのYさんの掛け声「ケンカスナヨー」には皆で笑ってしまいました。

販売場面が多く一年のうちでも一番忙しい10月の下旬の行事となりましたが、日々の「働くこと生きること」の中にほっと一息の外出行事。今回は「長寿を祝う会」という事で、高齢となった利用者の労を労うと共に、それぞれの生きてきた証を写真で振り返ることで、職員もこの人たちに謙虚に寄り添う気持ちを新たにできました。

(実行委員長 高橋)

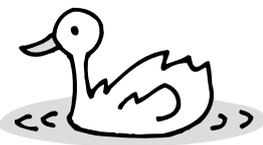


▲新しい仲間、アヒルのガーコちゃん。早速皆の人氣者だ。(神)

先日、アヒルのガーコちゃんが北総の仲間に加わりました。ありのまま芸班の作業場から元気に水浴びをしたり走りまわったりとする姿が見られます。利用者からも「ガーコちゃん」とたくさん声を掛けてもらい、なでてもらったり可愛がってもらっています。ガーコちゃんも可愛がってもらっているのがわかるのか、利用者が近くに行くと自ら近寄っていくこともあります。これからもたくさん声を掛け、利用者と一緒にガーコちゃんをお世話し、可愛がってあげたいと思います。

村議会だより

121



第77回後期保護者職員懇談会開催

今回11月2日後期保護者職員懇談会は第77回を迎えました。平均年齢55歳のこの人達の保護者会ですから参加困難なご家族が増える中、33家族42名にご参加いただきました本当にありがとうございます。昭和49年開所時からの田久保さん清水さん田中さん浦上さんも我が子のためにと一日ご参加くださいました。午前中は10月25日銚子太陽の里で行われた「長寿を祝う会」の様子を、映像ダイジェストでご覧いただきました。還暦11名・緑寿5名・古希4名・喜寿2名・傘寿2名と24名の利用者のお祝いです。若い頃の映像も取り入れ一人ひとりが「働くこと生きること」の日々を置いてきたことへの尊敬とお祝い、その笑顔に手芸介護班の手作りちゃんちゃんこが花を添えてくれました。

午後は園長挨拶の後に、新職員も含めて各作業班と各クラス運営について一言ずつ挨拶。利用者さんの子供や孫世代になる若い職員も増えました。園長から「利用者一人ひとりの後ろにいるご家族の顔を思い浮かべて丁寧に接すること」それが「一期一会一輪の花」の理念であるとの

話がありました。我々職員はきちんと北総の源流を知り、ちちははの想いを受け継ぐ仕事に努力していかなくてはなりません。各御家庭の不如意も承知しております。今後社会情勢、障害者福祉の動向も大きく変化していきます。今こそ「入所施設」の意義と存在が問われています。これからも「施設」と「家庭」が両輪となってこの人達を支えていきたいと思います。

(白樫)



▲保護者と職員はこの人を乗せた車の両輪。懇談会の都度、保護者職員合同写真を撮る。そうやって40年が経った。H29.11.2

シクラメンと干支人形贈る

船橋市に、北総育成園市の障害者支援施設「北総育成園」(武井敏朗園長の利用者たちが同市役所を訪れ、園内で丹精込めて育てたシクラメン11鉢と来年の干支(えと)「戌(いぬ)」の人形などを同市へ贈呈した。同園では約70人の利用者たちが社会生参加のために農耕、園芸、木工など作業をしている。日頃の作業の成果を多くの市民に知ってもらうため、毎年7月にアサガオ、11月にシクラメンの贈呈を約20年前から続けている。



11月26日(日)千葉日報
松戸市長(中央)にシクラメンと干支人形を贈った北総育成園の利用者ら。船橋市役所

が代表して訪問。鮮やかな赤や白の花を咲かせたシクラメンの鉢に加え、張り子と陶芸の「戌」を松戸徹市長に手渡した。

編集後記

早いもので、2017年も師走を迎えました。12月になると作業班外出や太巻き寿司教室、東庄ライオンズ招待クリスマス会に忘年会、そしてお正月外泊と楽しい行事が目白押しで、利用者の皆はウキウキ気分。園全体がちよっと浮足立ったような雰囲気になります。そんな時こそ基本に忠実に。一輪の花、整理整頓、履物を揃える。そして、外泊が叶わない利用者の気持ちにそっと寄り添

う心配りも大切です。今号は「自然・命・平和」を特集テーマに据え、巻頭と「街道をゆく」では、園長による渾身の平和への願いが綴られています。彼の国のミサイル発射や、抑止力ではなく攻撃の為の核保有など、この世界はどの方向に向かっていくのか不安になるようなニュースばかりですが、せめて「北総の里」は理想ではなく利益としての平和を追求していきたいです。読者の皆様、どうぞ良いお年を。



(絵鳩)

北総俳壇②

※働いた 今日のお昼は
なんたらな 加瀬 裕一
※木工の 門松が呼ぶ お正月
※林産班 原木なくても 汗流す
※忙しい 玉葱終れば 大根だ
※来た日から 庭付きの家
アヒルせん 杉本 和彦